茶道細集記

ヲg
669
1

門 ヲ多9
號 669
巻 1-4

上下

細集記 青生

一 衣裳の皮 秋(アマリ)花屋ハ花もちし其人ニ
お前しきるゝ用へし其々久字肩
衣も者ハ下ちついたもふ者ハ
一 惟子ハつませハ風雅の附ふ三月ニ
早ク風俗乃此記おしハ西へ山郡の附ふ
ゆくきくらくらくニ 裕 猶をきてくし
一 ゆくさこ如此婦とこ後ハ持て行也之

ちくは海地への時をやつらんは道の事を
以外のけ者にも云名は中立のまへは如き
のけ猶れ歩をかもかきもかきまの
けへし夏は水あるくあるくあるも廃
かもちくあるは此ちくはかうよ
一 雷消たる海地の事見者愛和ゆき
のけちは遠くは歩るまへし
一 雷雨かりや時は外の獨想は行のこ

笠縫宮の数ひろはかまの又げたをも
同し正へ並べし並所宮まし寸ほとのは
以後はさるれはおく事
一 朝夕の会にハ石をうちは火を灯をへし
飯をとらしんちりそこは三箇夜の八ッ時に
灯出へし俄りし灯にへは知りまして
悪之月清夜も同し夜と云ことは大きな
とうしんと三箇立へし風あるすしを
障子を

のけて置へし油皿をかたらけ一ツ宜之

一 せろらんにたひらびほしきをちりはるの
上れ計に熱(カチ)べしすなうきをすれの上
角(ケ)に立つけて宜之砂の宜れはなのうし
ろに山なりに宜はなべもかけ上之基を
今をはけて宜まも有但せろらんの方の
支也

一 其の洋に柄杓宜ゆしの支凡き洋に宜方

此洋に杓柄杓を用凡き洋に柄杓
をもあはてまろしく宜同角此洋ハ筋
かへにして柄杓の口を前に見あるゆしに
宜之又大きに横廣き洋に宜の末茲
柄杓をまちくに宜也

一 其の洋の下茂石其の方少すきそろう
しし水口より見あれはなし

一 杓葉のまゝ洋の半に地を能く茲を

のけ（ちき）教寄は座にまく置しいつきそろ
松葉は見るまゝねもの之組一月二日まへは
まきてよし 像にまゝ組へは松葉のび
しいて悪なり

一 松葉きはの友所りうすきはなし、まゝ
厚きもなし、松葉きはいふ横だりは
なしとなしあしきもてゝ重てゝ
自然たきよせそろやうにさしそろこさ

そそくるがよし

一 松葉のまゝ寄りしこゝ落葉松のきを重
そろもよし

一 せきしきを一足教寄屋のくりはつきこし
立つけて重へし面ゆりしそ笠げきと重
せきしきはいかゝもそろ加はさけて右

一 子田一り栄
一 友は教寄屋にすゝ組はくしまゝ組て
（友ハ右ニモ木ニモカワリ君モナリ小ヲこの打）
（△ヲモテヌレタルヲこの足ニ絵トリハこの足ニ云席出ス時ニ可足）
（すれニ小ヲ公）

こゝろ分水とうけてまとの下に重テ宮
来ると関て知るゝかゝりし為ゝ夜に
きいて見てよきく朝ゝとゝ叩けさるを
よし宮座後へ入して仕後すみのまへに
知るゝそゝまとゝとゝせて后中立の門
山も見てよし宮れゝ御より門へて
て思ひ座後へ入御中ゆて又まゐのゝ
すゝれとゝしゆてよし

一

一 門猶をふ思んざと宮の敷社とゝて宮て
ゝさゝりし重へし

一 御猶をまハ朝夜のかけさる門まハ淨衣御
と重へし西ゝ云中も同し重前ゝ猶を
の行風まゝ重へし

一 朝れ命ゝ御座後まゝ本地の行儀此
重へし西ゝ云中書よりゝ間ゝも書
も戸とゝ一西ゝ中しよりて重ゝ

[illegible]
光り強りそれハ悪敷候
[illegible]
屋ハ一面戸にメぬれらハ薄手にスヘシアントン
[illegible]

一 夜ことに[illegible]けいを敷寄食ま屋へ
[illegible]
湯[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 朝のことなりしに夜ハ七つ時ハ釜を敷寄
屋ハ掛へしに七つより前ハ寄ハ[illegible]も

ぬ[illegible]釜[illegible]所釜也へ[illegible]ハ[illegible]の
湯のやうに[illegible]七つ[illegible]を油[illegible]
屋[illegible]寄[illegible]入[illegible]て湯[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 釜の蓋朝屋[illegible]
但湯[illegible]
[illegible]

一 昼暁のこと也は火よりきはなりし釜の
也へも朝よりはなく也へるかよし但し
炭をなられさるをなりし
一 庚申を朝昼暁芸に初めは叩け内後花
一 はきなけの度朝夜なけさるは所
なけ事は（秋云ニモ）はきなけ事は（ツキ上ネ戸ハ）時は障子
をなしへおしへて昼内夜明ケて後
昼暁を初ハ尺八ハしはきなけ中は夜

をさらす母よりして竹の同紙布にて
墨下は府殿へ〳〵ちらのなり（棒）
也ても はきと上中は中立れ後も長紙
也ても はきと上中し是し而ふりかけ中ハ
なるか尺八也ても（みてつきと上中は）はきなけ中は
一 朝を夜々左に亭主方家へ遣す人を表に
二夜は昼暁を亭を出る左右を下し但し
時紙さして紙束はりてむかいに人をつう

ハ此ニ居時ハ客ニ来ルヘシ熱列亭ニ
より通ニ人と跡して後と御迎ニ来ル也
時ニ夏なりしハ一入ニ四ツ時ハ入ヘシ亭主ハ
後他ニ出とこさせ能時下をかんうへと
居たれ中ものゝ此ハ時ハ若ハ来ル
しかし石ゆも本ニ也多紙折し而かまき
してあしくて湯ハいつも西若ハ中ニ
大打ス時ハ紙来して産若人入時ハ

大紙打ス四持よりくれ

一 夏ハ朝夜の内ニ客ニ来ル也産若
数多き故之ニ和ハ後紙口ニしおいたし
瞳を関程ニ来行台雪ナリ朝ハ月ハ
夜ニハ早々ニ来ルものゝ

一 客ハ人ハ出ル人ハ来ルハ相客をそ紙
人して亭主ハ出門の和ニ居て稲
熱ケ返ハ入して待ル人ハしゆして

亭主をそこしに咄てもし客を其内ハ猶を
まて入て待へし

一 客持ろつて朝夕共に葉内まして亭を
（不拘ハ）
（前ニツクハ井テ二の座ニ亭ニ立ル）
見て此者。木草の人なるしんぐりこ礼と
して其巾と持てくり此内なりとぬ
いたりしへしを立ちけてさき人入
命し貴人なるしなくりの外へ出へ
一 客を先に此の時宜をして入命しくりの

きハ出てせきとをたさるへいりへし
雪なし出るまげ笠をもし出て命
其迷のたれものを叩き人立かけ或を
草履を添してもよし亭をのむしら
けさしたる笠ひきそいふへし

一 朝夜の門の乗命ハ塗膀胱と和媛
熱の上ハ置へし墨下を道を見へし接
ハなりさる所し出へしこ所を上客

二書家よりも暗純を持語く見て中々に
もらて行へし教寄屋へ入中時ハ刀掛も
くりも見て中石の道中も推さる所に
も暗純と並へし同じ相乗あるる上に
重なるかよしまれしも夜の見てぬ所
けしとて古のことに重ても不苦し家庭に
入とて行燈を入屋あるり
一 諸侯は氣と身ん事にかなりたんせら

ちんの内石のまへ中砂れ重中に見えて
板腰を乃ていい難石のすへ中をえて叩ん
ぜへし但夜の事紀附朝をせらちん
の内紀見せしも苦しかしすし夜明て
見中夜と夜と云小を行燈にて見屋し
一 主人清法の時の身ちくとしせらちん
をかけて見ふ中ても不苦し教寄屋へ
出入して清法ありしまれしもよし

そしいろも見つけし後に見えたりし
余国にしい法の時に右に行くこゝは
一 主人の法の時刀ハ外にもらせ置きし事
けし後に入そうらし主人分の業者
時も同意に称者の事に門徳悪ケの
行原に重へし
一 夏冬者に重暁の食にもの法ついて
いふへし朝に法ハ門前

一 等輩の人也同道にて刀掛に重へし棚
二三里にしたる長き棚に刀経き棚に称者
とりけへしけりかたと上になして重へし
小庭にかべの方になすべし但小刀さし後
上に有るべし主人もなら
一 庭者の方をさしとしかけて入れし
板立かけてせきしことをとりてそりれ
下れこうべに立つけて重へしも常に同
まゝも同じ

一 次ニ同前けるも同之

一 竹の子笠ぬきニ重ねたり服の如ぐに
ゑる様ていつ里の笠も別つニ重て重之

一 主人座敷へ出入して出せきことをとりて
たゝくくりの下に立かけて重るか
しに出候前のせきことに竹様にふみ
そろへて座へいるゝ立かけてせきことを
なとしや度悪但座敷も取給ふ立

ゆり詰みなしぬ而そしてせきことを
取てくりやきの如ぐに立かけ重ても苦
かしれば

一 客人座敷へ入まつ床の内と見るゝ様
に床の下ならしみの真中に居て
ゆれ出さてよく見へし如きうら
ゑぬものゝ但主人床の様に座して
起きたりそれ見て しんとして出意
しく

まつ此ハ正面かゝみ置し要合ハ
三尺の袖ハより清機嫌によりて入て
細ニ見ヲ示して見ヲ示してもかゝる事
ゆゑ以ニ置給うこゝいてよし

一 朝奪し夜明ケかゝるれども床内
を障子ハ給ひけと見ヲ示すもよし
但ニ夜ハけたるまゝ見へし

一 等輩ハ客にてしらくたゝこと床の内

とこそて亭主茶をたゝ庭へ行て炉中
たるの内ゆゑこれ内と見へし炉中ハ
見ヲ附ハ起ら給ひしそれ付ゑへし
たゝこれ障子もきつくなけしかね様ニ
あけへし次ニ客炉中と見ヲ内ハ
床の内を見ヲ中ハ又一書客ハ床ハ見ヲ
ゆゑ小住所にて下座ハ居へし上座ハ
居へハ後法人見ヲ○中ハ居ニ次ハ右ニ
ことく

いかゝ足者大きやうに立つかに至りて
見るへし是は主人未業よりすれ
一 右ことく相なるきヲ下に重て大筋着紙を
火をおろけるヨコリけそうなとこかこれ
有紙せその大筋は灰にきしそ大筋の
さうしとを少合灰とおして右れ
相なるきれ上にもちかいに重てうへ乃
上の片紙に重て灰なるとあ筋の

いろりふられさるへとせられまてる所を
なとし火にも西に灰とかけへし候
しあれへさるをおし所しは居のせうと
然しそ海かりし後のすゝ西戸時き
きいにもへれしいふてゝ板なるの
うちのたいをうきたつ先灰すくいを何
とのけにもて右の所になるなるなる
おしふくへに香合おしは名てふくべの

きまの為に重てなりてすみ紙をひいて
れて灰なり給くの上に重て下にかける
大器紙をひいし れていぞりへ置をうえ
をは大筋にしなすとしるかりし大すみ
と大筋にて れしへ取あり出度有所也
これの器は大筋にしれたつかいてよし
いかゆも筆前は大すみに重度くし
但夏は風炉のしたみは前後一度取事有に

ないもしを入りしはなりし器のせうこも
なきやうにさまいに一灰紙なおしし器も
すしきく置ものなかに

一 器をきは通りて番合をれて左に書きて
蓋をかけて大筋紙取て其器のかたよ
りてさげしきと見えてそうなくべ通
其後は伽羅 名をそれをのくし

一 客人も高とくべしてかしあれへいなとうへ

一 亭主も香たくべしとて火箸にてたきこみの
灰をかきて土徒の灰をならしよりおく　香
合の蓋を左の手にて右の手にて香合をとり
立ながらくべ候の内より香合を左へ渡すよ
まへかけし座して挨拶座て又ちいさく
の釣もおさし板に置て有り網
炭をとりて一つ火箸とも一くべし
行りとせ相かゝさをとりて右ねたし

右へべしお婦への事をとくさり候
まき入又かくべりしのことく座て板をき
とりもかくべ小壺合共炉釜の蓋をとり
湯の座り中を見て中くてかきとるい
おく通くと出して立合ひ候へ立なり
亭主は風炉の時は炉釜の蓋を取て
かしおくま時も炉釜とおき釜の間へよ
かしとして炭斗を釜と膝のあと

金茶巾とれて釜れかゝるの上に左き行口の
かゝるを女のまゝしたりけあれのけまたして
釜の前に屋ゝこと以れ浴け是に金右れ
茶巾ともに釜れかゝるを其行口乃蓋の内右
かゝるもさせ金こそ茶巾と左に浴し右に
て行口れ持左にさらゝ茶巾と口れ下に
まけてしれ得れとさし右れ而に行口と
金茶巾にし釜れ口出りと思ふいかゝの処り

そこ返も思ふいして茶巾左に浴し右に
釜の蓋を志め茶巾に出行とのけれして
有て行口のかゝるに金こそ浴し行口にたのけ
かゝる蓋にして居かゝる行口れ結ひ出
障子れ立いろりにむかい炉中と見すみ
かゝりすゝて釜と然屋しかゝるを
しりたんそれ其寄て長火箱(ハシ)にし取てのけ
炭れ金浴くへしこそ先炭金浴也とても
かゝべき

釜とりあけて後掃除へおきて茶わんひやす
たのことくまはしてひしやくは向に置とすへ
茶わんとりて茶入をうけもちていろりの
まへにをきて見合てひきよせさらして水さしよ
うけ長に茶わんとりてうけ出て釜のふたを
みひれてあしこいろりへ柄杓茶わんのことを
たゆし勝手口にて文をひろけて客有
此後んしてこのあはひ一もんれ客も大形然
ころ

一膳済て見て中をとりかさねみせる
客にわたし後はいろりへ寄てかへりて
亭主になみよし茶たて茶入かへりて茶わんと
炭取出の中入おくへし此初にも挑
小をとりを見客有る時も前のことく挑よ
置て又跡中もうみ出し板籠は障子然
いけて炭入とりて箒をおきてはかり
きとめらておいろり出りそめたつる哉

ふたをしてうけこさらに湯にへ
こなまいてうるも有る事向合ひ然へ
是ハなくしいの事そ御へし
一 料理お来ひて拵ひおしらせて移る間
中れいきたけのあるとりちおいきとの
下のう魚に中れあるひ立うけ障子を
右れまこしたけ左こしたきたけをいへ
右のまけし尺八行と云こしに拵ひ事と

こ給ひへそのまこし中れあるひ立て法さと
障子ひ御給し知き込則膳をおく魚し
一 食の入様者よりハ少しくなくへこるかよし
一 けに一書のけハいかにもよくなく但解り
しくなくもたし二書けにつきのことし
三書乃けに初のけよりも書くなくへ魚し
一 子間になくしも者よりにすく所くもるへし
いぱきも給ひ者おして皿の円に常分すく

なくいふべし

一 主筈の内又は拝なし其入お客ものは客れ
数に小なるせておスをなし所なり出
そなふうよくは

一 食いきの食なるも初は壱人ニ付二壱くし
なりてよし二書の食いきにも二壱くし
あて(宛)よし絶切りきれしてあんがと
入お客ゆし

一 酒なしは壱きなりておしはてもよしそう
ぬしは器変は二書のくるへうしは多くいさ
おしそなかよし

一 膳は持おは附は亭主かりひ所しさい壱
うへなしは小姓のかりひかよくは客は掐
ちゆ(中)しらをさげいそしき下ニ
重へし尤初より膝とくはして居は膳
おは附は公さをなとして膳とうけ也

膳部へ法也して稲子の漬子をそてさ後に
起さを法くこゝへ中にて能きこゝ出へし
後に起きさいを引付て御出へしこゝ後に
食法きの下に丸盆をしけて御前丸盆
ともに下に盃上座の人に膳乃口きあり
食ひきと盃を盃をもらてすくにけを
うへ置し如此法にて後に有て御法は
御ゝせそ御かあしく御前上座の人けを

ゆくにさりとてけ之に来て居おし
そるかよしけのくいゆゝ御の御のまゝりよ
こ是ニ御様にして円れけもみも御らぬ
中に御法へとて御しさるがよし紙にいロ
又ハ莫鳥の有ゝ御ゝはそへらまゝ御
御者こそ御重るかよしけ様に蓋を添
て御出へし客方ニ御法へて法江の人也も
くるし叩ゝ法御一しきさい入て蓋なくして

猶ほ常に別のことしておしまふことは
法はれは前にもちて沼のけかへは用ひけと
もりはるに沼のけ紙つへ中間がよしさなり紙
るのひくしたへ中は

一 何にても嫌物なりは一角にも紙けへ寸
もしけはものにさまいはのこさをくへし

一 けへ(髪)法道はるに中庭乃家食ひきの内と
段々解りたるめしなりは一所にせ居

小ひきたる食はたる面に蓋をして猶
口のものは四角ハさる所に重へし

一 けうへ中るは紙(引)きは(葉)いなりは亭を如しも
法はの人如しももちあへしたるは逆
如中は何なりも何紙入ものあるはそむは
とりこむへし

一 食ひき一座おして後は亭主分ハいるし中は
必客よりはたるかよし其所たるとく

丸なんとけしておしこるもらし又ハ亭主
持おかれと門ゆて食べきけおし此けん
ゆへなすとしやして起きけるみこうもらし

一 盃家の数をつゝ主者ハ丁人左ハ右ニ
酒をとらし亭主かゝりひも右さいく亭主
うりひ且おかれ小姓よりも給おしても右
座敷ゆへ上座の人ハ前ニ盃之酒ゆきハ
各々忍さし酒ゆきくれ夏ハ起やさけ

なすとへさし酒ゆきに入ルてハ悪敷ハ

一 酒おかれ客ハ左自砂ゆしまりしの事ハ
何も引さい道もぢもりやとへさに主人
うりやいつもぢもりうるへし

一 酒一盃ん おゆて貴代おしこ用亭主
此おかんとなとしの事とて引過まゝ
亭主持おかれ亭主ニ亭こゝし志い盃し組ニ
三盃んより上ハ志い盃うら寸客も三盃ん

より上の事へ入らず口切う初て中へ入る客
なりしにて客の御盃なりしへとのそこ
てもよし客もさしたるかよしこ所位
御しすれ主人と中へ入て御盃を立て主へ
此下納よしこ居たるがよし

一 御茶にて里きく角さしすの平打发り
湯いきとのせおりしたすとおそへおし則
こ湯いきしこかしと上茶は玉其打发し

いきとそりたるもよし但客の打发と行ふ
其後をこれたるもよし如きにて御道にて
御道の陸子御手にて道にて道にて
立主に此お膳とも此下は客は湯のこし時
椀の内に面と入らくしてきしまへのことし
まんも四もちへさらやしは玉へし立主
おさたる猪ぶとちへは一は立主にしたりしに
似たる者に着かしを初めに小さちまわせ

むかは後ハ少ちかりしをしふかしまへおとして主
しろうよりし立て接ぬまと来りしを流そ
何しようしらぬさけ礼あるへし又接を後
は附接ぬうきてもよくは其所立て主も
行まぬいき礼としてこさまいまおりしろ
よしこつかは

一 膳取給道とて掃れ障子をとつへし皆菜
をうしをいたしかへし

一 菜菓子と度定りしろ菜菓子とてあるは
こと所にまたてこうつ之但いつ里の餘なりも
其ツ或ツなりしに又ハ先ハ御ものをおとへ
おしとて面にハ入中しと添ふらる家
の数ありしに定てむしは家ハ六人もて
引しつよかさ○とてハなかりしは当ふらる
三ツ二度ハおしとてもよし主人かしや
入し所も主人御前ハかりしをおし茶ハ

うきみていこしらるがうし一色の菓子
をかちこるひしろいて面こゝに墨て出ハ悪
紙のき菓子盆をいまいまこらうしこを
附をやしこも行ひきに宮の数ゑらつ
しておしやかなる
一 やしをくるもしなしよくに長サ六寸
有しかしてよりしなそきやしく
一 舎席まへに炭おりをしてけたゝ出て

菓子ゑおしてこそ居をみ紙おもひ垂し
宮をすゝこに四角りを菓子をとりて
うちゐるけい宮の紙をうつこうさ口行ひきく
なとしして炭を見るころかよし
一 舎席前にすみ紙垂(ひく)菓子をおして
亭主ハ立洛化くもあるしこうせに水なし
入させ柄杓をよくこ垂けるせ色をなし
ろくに如きを見いくらいそたいるへし

一

惣別ゟ者乃ゟ何者ゟ何ゟ事ゟ也ゟ入相解り
とて出りにうつ申し
客ゟ菓子ゟ入ゟ迫とて菓子入さきゟ出いに
して何も一ツにうさき○揃ゟ口れ物ゟ加ゟ
たさる所の所様に上せて垂之但其に主人
のゝ供にとて御前れ菓子入に下ニのハ主
魚ゟ寸板落ゟより立て主揃ゟ入ゟ迫出を
笑てゟのに立へし座愛のすゝ申いにより

一

座上ゟ出て来ぬ度ゟ申ゟ迫き
人ゟ出しもゟ但下座の人迫にのこり
座愛の巻ゟしあらんゟ又ハ障子をし抱き
匝とて立てして出ゟ役にし者下座の人ハ
うゟ出行しゟ申ゟ
主人御供の時ハ一人さゝ御人お菓履ゟ
なとしるゟ腰掛ゟ口供の所ハ
係然ゟ内の少々名れ上ゟ所くたいて迫へ

ちつし高くしくすへし但風炉先を
高くしてもせしにてもかくへし風炉六
風炉のたい高き立ゆ有之
一 床に初め掛物にして其所に花を入置し
但主人ゟ又ゞ数寄の切者客に中へして
花入け其合数の足折に花を入茶巾に刀
水ツきを添床に重合せるもよし其合の
事別書有り

一 炉中火加減よりて火を入添ちさこの
にても伽羅にもくべ置し ソレ 其合
ほと面と入度の内は道にて亭主大相なき
をもちくりとなけたきいたし客れ
耳に加へきの音こさこへ中なりに折たき
くりとさし置きこんし
一 客を相客に礼としてもあるとしていまへ
かく亭主其ころ中に栖敬と書てへ

一 亦し會席の時も菓の附し上菓等有
衣炭くり主席ゟとれはたゞり中々の上菓を
居て菓の附にたのと上菓を居る遠くりてちや
梳居出されしも遠く小座敷へ居留り候
一 客花を御入りうし亭主出て御見へてし
御りさう花紙取てひきこゝ御茶たてゝ
やかくし蟲身しや客も一親申そのく
一 亭主の花くして亭一主菓されにまゐ

一 時花生気を付りんなへし花入の中も水(カンジ)を付むかしよし
一 水こぼしふめんはゞなしハ是ちやを付ても
揚の方へなりてかまとさと水こぼしよ入
なさし置(ヲ)あせてあこぼのうちに流し
たのまに水こぼしとさりて出茶へ揚よ有
せうしとさそいろりの前ふ紙いるをとりて
まづ釜の蓋をとりてりし板居も紙を置て
よ

にけいかもたゝ胴と浴くにして左のゆいまゆ
柄鉄の忍れかしとはまみまへに右へ切し
右とのけになし右の手けし小さり右の膝れ
上ゆきら又左にしつさときをゆいこつけし也り
柄鉄りちゐらた左のつさときをゆいこつに
ひ上中く来りちそへた左けし柄鉄と也ゐらに
いゆ我を浴へ柄鉄れかしとちた左の忍ざ乃
上にものこ甲と身柄鉄れ柄乃さきと膝に

添柄鉄れこゝと膝のさ記しあれしゆりに
もちてよりしひさりさ記へむそるを思ひ
扨右れもの蓋重とすくに重人(セ)引切なしは
竹の目と宮の方へなし左れ柄鉄を中に
右に浴ゑかしより下とにさりてつさ重れ
上ゆ右とのけにして重之ことは宮人ゆへく
ゑをしたへし宮を直ち主も浴くなり
ゝ作へてそうひに礼としてに単なるハ

ゆひこツこん葉入とおして袋より出きいたし
ハ附ヌツの指紙添て持切の膝ハまへの是ニ玉
袋とはそれにも玉之又指ゝ柱ハ計にも
うけやハ針ニうけや附ハ面へおさゝれをくたの
ゆひこツこんとり添ほつ座にして玉をの
かゝと柜ハ前ハ方になして計ようけいゝにも
ゆゝぐに掛りし紙にあるゆして鉱玉こまゝ
たなに玉ハ附ハ面へむゝろをゝ右のをゝ右

さ紙へおりゆし左へおゝろをハ左こんおり也
そるへよむきのよ紙方ハよこんもち袋の
そこと前になして之子のかゝわきへ玉也
次に腰にたさゝそうあくけこさぬと右
とり水こほしの上こんそしゝついて則たに
もち葉入を左にしとりしほしくゝ
座しあれやしを定まゝ寸葉入を少し
は過しゝ葉入のおりてを見て是左こん玉合

置し客の方へ茶入れおきてとむけさしらし
太れよの手にて衣を左へ流し太にしてさ事く
のかしめ通りをゆひこつかしえなとのけよ
してあしよりさんをかさての内へ持ち
置し貝かいのさきをかさて又あしより
まへとかさきの母さんへにさゝもし太のよ
けし又かつれ通りをゆひこつかしもち
茶入乃かさの上よりそさせうけて置之板

左にし持うかてさ衣を太のよ流し太の
こと腰母えさことよけし茶せん招三ツ
けしなみめれ通りをあ左れよのあらけし
切口の上まいかきかさてい又かつれゆひとナラヘテ置て
茶入れ板へ太して置なとあかる茶巾太の
よこりあさましれうされ直中に置なり
板衣ありしはかてさめて釜も衣流れ太くし
柄杓とえ左流しまろしとし釜蓋

蓋をゆひ二つにしかへしたゝみてふた
置をはてしかへしふたと柄杓さしはさせ
ちりくとおとして釜のふたしてすこし柄を
蓋置の右の中ほと置し蓋へかけてよく
そゝぎもなかしすてへし

一 柄杓左の手にかまへとし湯をくみ小柄
杓の内をと言るゆひの上に置てひきさし
ゆひの脇に入通りくしてさゝ大ゆひのさきし

柄杓を右へ持まへ左の手の内に取ほそ
ふきり子を茶巾にて杓のうちをふきて
扨て湯をくみ茶碗の湯を釜にことくと
そゝかくし　柄杓持ちかへ右手にて三度ほど
ふり落し柄杓こゝろへ右柄杓の先
釜の口にわたしさらりにおとへもし
水よ湯を茶碗へ入柄杓を置釜の口にわたせ
置たれまへ茶碗をと見茶へ流し湯を
とて

右のまゝに茶筅れ三つくとぬくい号右れ
まゝにもち左と添まへのところ三玉又同と
くゝ茶筅へ入柄杓左へ添しまへのこと
もち右まして釜乃ゆるとゑんまへのこと
柄杓と右に添し蓋金れゆへにとゝなり
一 茶筅右くゆひ三つにも同ゆるも持茶筅
に入茶筅とよこにして茶筅にもち二ツ
まゝし茶筅のうるにはてなくして其

まゝ茶筅に玉茶巾と取り同ツすみ此引
右とよりして左へ回しせん此方と法
なうしやはたるうしやと反れるゆひに
茶巾をかさせこる指の上に茶巾と引
さしゆひと大ゆひにはしてのしやは
杓すこと角と反て起きのへ中と左の指
三ツにこり同ツにおり又右に又中に打て
又中をおりかへしかつくりとして右に

各さしの上ニ並て茶碗の中の茶筅三ツ
けるもメツかてもハ持て志(都)ゆくやうて茶
碗のうちへ如きと上ゆひ三ツしまらのこる
ゆひを添て茶入より右の方にあらへて置
置合別書ニ有り次ニ茶碗ハ右ニ置
右けし茶巾と如て湯迎して志ゆくと茶
巾かてまけて海ニ茶巾と茶碗へいまき
茶巾のちしと如きおし茶碗のうちへあり

うけてゆひとかへくりとのへまくひのと
きさらかしニツ三ツ程ふさて却(おり)け掛ら
茶巾と茶碗の中へ如迎茶碗のそこ此一ツ
二ツ程ふきこそ海ニ茶巾と茶碗の中より
面なりしら右のまゝ茶碗とそらへ
下ニ面板茶巾と如すしくと如ひきの(ひ)へ
てこそ海ニ右ニしくそくみてかへくりとて
水さしの上ニ並其まけし茶志やく此

ゆひこゝろ元葉志やくれふしの通りとこうて
葉入をたゝしこり葉志やくもちなうら葉
入のふるをゆひこゝろしたげこも蓋ひ志やくの
柄れさうれまもらせうけても蓋之改ゑ三ヘリ下
葉入のふるこも葉硯よりつまこも石の方よ
重之扨葉入をちやまんのきるへよせ葉と
そふしも歩くひ二三度ま一度ゆも葉と
うき傍せ葉れ大小の和減を見てすしなら

入へし以まさ志やくに葉にきして葉硯の
ちこんたこきおとしてこも傍葉志やく
をたとのけふして葉硯のうへまきすこ
重て葉入れ口ゆひしひてらいて蓋とす
多くふるのはゆしさ其所はにはまこまさら
歩ちるをれふるをしちらけもおれしひだこ
れなとも所にはゆみよ引しさしとうけて
なれしやひ扨まんのことく尤のまわく

あ寒に金にかけ世板葉硯の内の葉にかく
さしやくけどくるこさえろげて。又葉硯ニ葉付して
おしして。尾に浴し右にぬる所衣袋
さしやくと夜うへかさ衣と尾にもち
右に葉しやくとおてかいたりをぬくい
てきゆし右にて葉しやくのかしの通り
をもち葉へ入りしせうけて金門に塗物
の葉へしくり葉しやくにつきそろ葉と

一

ぬくいけてきゆしたとのけにしてかさの
上に金之葉しやくのかしとかさの中より
かさ出へいてしておくなり
右にぬる所衣と尾にもちなしまんのごとく
右のもとに柄杓とも尾にかさしかさ衣
けし釜のかさと前のしかさ金の上に
金柄杓を右にかしし右のことくおて能
ほしに湯とくこ葉硯に入て柄杓釜に

蓋重ねるこれしの程に重もりし時こそ
変ぐれにかゝる重なれて其水これしれわきの
真中に置二周ありしかけて重へし
かゝる重に周かくしてこれの方へなりて重へし
かはきりて居へし

一

上座の客亭主茶筅とかりの事礼をして
まへかし膝をくゝして居て其所をさし
そして茶筅（碗カ）を指出せば持て居へし茶（立）

しけり茶碗のかしにはより色と見て茶碗を
そなる所と見えて上座の人茶碗をうけ出
ていくしきて三口程のみ口をゆひ
出さい杖又いくしきて次の人に下に重て
添をへし次このゝ中同前にこれ
けしの心無うしすかしけ加へし
主人れ御供の所をのゝて何をいくく
へしこれのゝ納る人を茶碗をもらて

かしのことく右れ取ニ書ニ尤ニ柄杓とれ
右ニ付ニし蓋重の上ニ重て葉椀の通り
ゆと得へし亭主葉椀請ニて前ニ書ニ時
右客一座ニ示し礼と下ニ申ニ申ニ以と
書ニ以ツケテ申ニ礼ニ申ニ以ニ
より客へ申ニ得ニ申ニ申ニ葉前ニ
膝とくとして又得ニ申ニ居ニし柄杓と
右ニ礼ニ居ニ得ニし右ニて釜乃蓋とれて

湯ニ得ニ申ニ申ニ葉椀ニ入柄杓ハその間
釜ニ置きこうけて重右ニて葉椀とれ
ものなりニ葉椀とのせ右れ引きしゆひ
けし葉椀ニ付きそる葉椀おとして湯と
すてしつくと右のよこれ書けて易事ニて
下ニ書テ薄ノ事ニ書ニ入ニ申ニ客ハ
亭主御迎ニ入ニ申ニ申ニ納ハ申ニ
中が時直ニし亭ニ書ニ示ニ申ニて納ハ

一 一ゆし但宮人の初夏の紀人にしてゆ陣をも
ふ存ゆるゆらしてこの中と中ゆて立てるか
右ゆとへ主人にもうして菜ハこそ下中かと
ハ中もの事そし
一 こい菜ちりこれ納めて水さしの上ゆ
座ゆり菜巾と丸釜ゆるの上に重ゆ
あさしゆふゆひ二ゆこれ候まみ紀ゆ
ゆひといのへて志すしにあこ有しゆ上まて

持こし左の大指を上にあして下のあし
を左にしけまかしむけて家をなし
石のまさ紀に落を丸て立てけ中ゆ候ま
みを重ゆて置て丸ゆ上ゆ無りに熱さる様
かべよこそけ中ゆ金中を水さしゆ通り
のうべ之別書にあり板柄奴乃ゆしより
中ゆ右にしにさり釜より丸ゆしを乃
手けし事ゆ上ヲ中ゆひ丸ゆこれ右者

ことくに丸なをし水を汲を柄酌のごとを
かせて水の中をそこぶくと汲茶碗にいまき
柄酌釜に汲きうけておき茶筅すき茶
筅と茶碗のたるへもたるせ二ツ三ツ有しか
なるしさハくせかりて茶碗のたるへちや
せんとおきうけて貴(拔ヵ)なけて右の取へ金
合右の手にし茶碗ととり左へ口こして
右にて茶夜とれてから茶碗の水とこほ

夜と茶(巾)丸にて丸右のことくふきて茶碗と
下に金茶丸と丸て角くおり也しハ口に
おりて出茶碗に入茶筅と右ゑ丸茶巾の
上に金てかくれ丸とおし左に丸ち茶釜
を右ゑ丸ゆふのけ(テ)ふしよさ丸とふきて
又行くへふき底してふしの通りを茶碗
の上にぞつむけてさいしゞに重へしさて
かくさ丸とこしにたきて茶入と

夜の知ぢ候ハ是ニ御けり頃とさけてかんし
菜への義をみしつゝ金布と見て居へし
卒ニ分ハ其御覧ハしとやさ候ハ
手に取へ入て卒主を家ハ小ニ入すれ
ハ取して覧ハしとやもの之名内かゝ内ハ
ハ其時夜ハ人れ有ニ時宜ヲ
スル神ニテ祝ヲ
こそ居所の人お家ハ時宜とするていまして
なれ菜へ入れこさへ家左れハのこゝ甲と見ニ
行て右れハ菜へとおいかゝ見こさし

こゝ左のハれたしへのせかさりて一ス二サ
祝ヲ
いとゝ見て一つ二さと二乃見しき地ハ玉ハ指
ハ右ニテ茎ヲ孔テ茎ノ法根ヲ見テ二ツ茎ハ二ツ陰ニ金ヨリモ
ヨリ菜入ニ御常ノ御ハ刈ヨリ上ニ筆ニモ移ニ玉板ヲ
三ツ入しかゝのこと見て
右れ府子れ上ニ玉て板菜へのロまりかゝの
ていい菜のおりこゝ見てこと立て
菜もすくそく見へしゝ菜へをかかゝ
てそこ作りとも見へし板菜へと迎して
見ゆてゝ菜へ入れおりての方と人れ前ハ
右ノ茎ヲメ筆ニモロクニ茎ヲメ

なして沿へ流へし。常の道具ニ扇子より
不重ゆゑとよふまちかしに口切り門を入て
則ふさして右のことくゑくらうしに
流しに前も菜入とるくまちよへらに
いかもよ記こさにまちて是に重て流へし
沿の見様同前之
下座の人菜入と見は追しけて上座へ退へし
上座の人うけ出て又入りていとして菜の

ムシハ、浚シ時モ菜入ヲニタリ其ニ持上ル事ニモ也
ビキニ持テ通ヒニ重ヒシコノ浚次ノ見様同前ニ

おもてと亂まへ出して右に亭ゑ重ゑ中ニ
同前にしおく通し
一
亭ゑを客の菜入と入て是ゆゑに菜碗と
まちて立給へいさし又水さしと女のよ
けしまち給へいさし板も巾とりて水
さしのかゝらぬ心ゑい菜入の儀ならハ出て
記記こゑなくこゑ此ゑ座ゑしにて此
とさは追してうしなくこゑのせしとなけて

柄酌と計ゆけて下に蓋重ねとりて板菓
硯とそしこのそなれ其中に書き下の真
中に水さしと重て障子ゆきて水こほし
ちりともちて絵をへ這へし板ゆきも
菓子ゆきて出へし菓子とたへ此戸内(召)より
門口と物出たらこれ前に重てせらしと
ゆけて有さしとかまへ、知さいるして
ゆきと此絵は此方の門れ(板)いまゆきは

りゆけて重へし板水とにさしてゆきと
して右のことく其中まなとし門口は
居るゆ絵をへいるして菓硯とおて這へ
此時家ゆ器と取出て此戸度
家人ゆ菓入れ出してかへさんはゆかは
亭主道具ゆりこゝてのすゆをゆ人て此
中大形をたらこゝに乃見へ出し御ゆ
亭主を其居ゆけれて菓硯を出ゆこ

一

[illegible]

一

[illegible]

入こ雨ゟ如をはこゝとりこしすくい道こしおち
さらゆゝまゝらん為へ入杉火筋とそこ此を
くまてゝらんたのとまゝ重ているゝ給ふへ
おし杉ないといふもこさまいまなとし
炭のぜゝれなおやゝかしてか落くとすゝ
と重へし又やゝは迫やゝ右のことし此時
釜に水はくけるもおよりかし
一 風炉こし茶之ハてのすゝ皇は荘もの之

一 右ふこいちやゝりこしおさあしりて炭重
は迫ゝて引手を落くそろへしたゝこの
有産者を右のことく此重せゝへを勝
ゝへおしまゝらきこし迫りとまさ此て
ゝたゝこゝれせしとなけ水さしといふ
右れ而ま重人降ゝ此そて給ふへ立く
右の茶筋にはゝ茶巾ふゝりと
そしみ茶筋の中ま重てこせ之ニ茶筋之

のせて釜へしたに菓籠右に薄菓ありて
せし菓へを菓籠の通りより少こゝ（先へ書ス）
おなし通りにまゝ変なし下に釜の附
又拵ひ菓へ下に釜（テ右ニ付ニ又書ス）掛水こゝ
とかゝる御しへ手とむしゝ花て右の
釜へたゝこれ清ゝ手ゝ抑敬とも
右にもちたし蓋釜ゝ花て右と花へ
則（前ノ如クニ立位今）たしせしとそ
ゝ通し位御ゝより

菓籠なりしゝあれ立て薄菓の附又まゝり立
又は薄菓一面ん立て一附菓巾の変こい
ちやのこゝ水さしれ上に菓巾とは書ス
うすもやの附に菓巾はなりて又菓籠
の内へ入釜て釜のかゝと紙を花て右と（抑敬たこ花ゝ）
（菓巾ヲ右ニ入れ又ハ釜ノ上ニ釜ニテ立ハ此ハ云ヒ）
花へ易たしせしとそ通し位御ゝ
菓籠あしゝあれ立て薄菓の附又は通り立
又は薄菓一面ん立て附菓巾の変こいちやの

附は水さし此上に菓巾とは垂一片薄菓の
ことにて菓巾はなるべし此て菓碗の内へ
入重ねて蓋を垂て柄敵尾に持ちから
菓巾をたゝし夜釜のうち此上に垂てたて
此巾者夜なるべし

一

薄菓は迫しくたれとく道夜御ゆへかし
すゝ主はてうし立て主にあるかゆて御ゆ
ゆゑしてし一事客は菓郎にしも一事なる

ゆゑの中にて教寄座に立て此儀はて立
主は御ゆへ入重し客は濃くと座安とみ
は迫釜庫の内にて見して下座分にて左
なるべし刀上下に如して行つかいかゝし立る
ハ客は座安とも刀とさしやうは見て
後地へもおくるべし客は後地とはなりして
立るへかんにて立るは和後地迫は立
して和けし礼なるべし言ふ礼のきそこゝ

一 新用のうし屋くおとくやうにし
教寄は追しても浮化しまたとも改めして
重へし前薬にはしに宮来る度有ものを
一 屋子れは前の度も絶なり
一 いてよし紀号のまま柄敵をれ柄敵とおとて
尻乃かうれや程れ号ようしまいろ口を
一 一書に水こほしと石しれ其へ流し出たの
膝れりとへ重へしひさかしらまる水こほし

もうるうよし紀大きなは膝乃さおへいうして
重ようもうし
一 二書に柄敵右しれり左へ流し蓋重れ
右しれ水こほしと板とのうより少さおへ
よせて重へし屋りようを二月三月号と
重へし紀釜れ少さ大少ようも入りし
とくにけへさうやうにすへし
一 三度に薬屋を左しれ其右しれ薬入を取り

一座に上りおろし水さしのまへにおさ
なるせ中の手事
一四番に入る時衣と花へし様と花けるへ
右にしつき花とうくへし則縁にたきこれ
一五番に茶碗と花にし花瓶前に重さ有
右のまとをうけて下に重へし
一六番に茶入を右にし反袋に入て常の
ことくこれして袋とは棚の片縁に可重太乃

にしく茶入をふきして水指のまへ茶碗の通
重へし蓋重の通りをたつして重ならし
一七番にさしやくつのことし
一八番に茶筅茶入ちかまへにまちくて重へ
蓋重とこゝのならはさらゆゝこゝの事く
一九番に茶巾に袋のことく水さしの上に
こいちやたるはおくへし
薄茶なるハ茶碗に入重へし其中に袋の

も前に右易へうち丁は水指は蓋を風
炉の左れ根板のことかへにもうせけて
重へし柄杓釜れとに重は筆にのけ
かきこもへすらくておくへし
一 こりときやれ皮は縁のことし但れ於き紫
入茶碗右のことく水指はまへに重はて水指の
ことと志見柄杓蓋を重にうけておきて
水指の蓋は志のて板柄杓と右へ口より

左へ倒し蓋重は右にて右のことく板の
上に重て柄杓立に柄杓をさしかさ
りて茶入茶碗を右れことくもちて柄
右のことく重て其後ふ所衣と右のこと
ゆいつけて水こりしと持て立多とすて
ゆて右れことくまいはへ重へ中へ
一 薄茶ちうり立様の皮右に右易は玄なる
茶入茶碗と水指はまへに重合ぶして

すぐに、承まへ(御)重之下に重ね菓入れ
か菓籠を前にすゝめ、しかへ重ねのよし菓入
とちやもんの間に手れ入事なるべし
菓入を上うら取て出て水指のまへに
重へし此外右のことし
一 風猛を基子れ手前に不相易れ